

学部・研究科 Faculty/School	学科・コース Course
保健学研究科	パブリックヘルス領域

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt;
 (4) ジェンダーに敏感な災害対策はどのようなものだと思いますか

私はユネスコチェアサマープログラムに参加して、様々な経験をすることができた。10 日間のプログラムの前半は主に講義やフィールドワークを行った。

講義では津波や地震の発生メカニズムやそのような災害発生時にどのような対応をしていくべきなのか、また世界的に行われている取り組みについての講義を受けた。様々な国の先生方が講義をしてくださり、国による違いや日本にはないシステムなどを知ることができた。特に今回のプログラムのテーマであるジェンダーや脆弱性の視点からの講義や、災害時のメンタルヘルスに関する講義が印象的だった。Gender Gap Index (男女格差指数) という男女間の不均衡を示す指標によると日本は 114 位、インドネシアは 84 位であり、どちらの国もまだまだ改善すべき点がたくさんあることが示されていた。これは災害時にさらに顕著に表れているなど感じた。例えば災害時に女性が着替えるスペースや下着などを干す場所が確保されていないこと、乳幼児を育てる女性に対する配慮がないこと、女性の生理用品や子育て用品の数が十分に備え付けられていないことなどたくさん問題が生じていることを知った。女性と男性によりニーズが異なっていることがなかなか考慮されづらいというのが現状であり、またこれは災害に関する会議などに女性メンバーが参加できていないことなどが原因として考えられる。また女性以外にも高齢者や子供など弱い立場にある人に対しても配慮が必要である。災害が起こる前からこのような状況が起こることを想定した備えをしていくことが求められており、それらが減災にもつながっていくのではないかと思った。また精神面に関しては災害により家族や親しい人が亡くなったり、住居環境が大きく変化することにより PTSD、不安やうつ、急性ストレス反応、QOL の低下、そして自殺などの問題が生じる。2011 年に起きた東日本大震災では、津波や原発事故により多くの人々が避難所生活を余儀なくされたことにより、身体、精神的に不調をきたし亡くなるという災害関連死も多数起こっている。このように災害が起きたときに助かった命が、その後の避難所生活の中で失われてしまうということがないように避難所生活の環境を整えていく必要がある。

フィールドワークでは沿岸部にある Kemadang Village に行き、海の様子を常時観察している施設の見学をした。この村は海に大変近く、洪水になりやすい地形であり、過去には洪水による浸水被害も多数起きていた。過去の教訓を活かし、住民に対して災害教育やシミュレーションを行ったり、evacuation map を作成して誰もが地域の危険箇所を把握できるような取り組みが行われていた。また災害が起きたことを住民に知らせる kentongan という竹でできており、大きな音を出すことができる楽器のようなものも体験させていただいた。このように様々な災害教育がなされた結果、災害時に住民たちが遠くに逃げるようになり、商売をする場所をより安全な場所に変えたなどの成果もみられた。また BPBD DIY (Regional Board for Disaster Management) と Cangkringan にあるメラピ火山の噴火によって避難してきた人たちが暮らす地域の見学をした。私はほぼ 1 年中噴煙を上げており、いつ噴火してもおかしくない土地になぜ人が住むのか、なぜ避難を拒むのかなど疑問に思うことがたくさんあったが、実際に施設を見学したり、住民の方の話を聞いてそのわけを知ることができた。メラピ火山には山の山頂付近から麓までいくつかの村があり多くの人々が暮らしている。これは長年の噴火により堆積した火山灰は肥沃な土壌を生み出し、農産物を育てるのに適した土壌を形成しているからである。しかし 2010 年の大噴火では約 320 人の方が亡くなり、約 40 万人もの人々が避難を強いられた。このような環境で暮らしていくためには、住民たちに火山防災教育を行い、少しでも被害を少なくするような取り組みをしていく必要がある。さらに政府から復興に向けての支援も行われている。シスタービレッジをつくって、被害にあった村ごと場所を移したり、噴火により失った家畜たちを、国のお金で補償するなどの災害にあった後の支援も考えられていた。日本では災害により避難所生活を送った後に、元いた地域に戻っ

てくる人もいるが、全く違う土地に引っ越してしまう人も多い。このように災害により古くからあったコミュニティが崩壊してしまったり、転居先での生活に適応できないという事例も多く起こっており、インドネシアのシスタービレッジの取り組みは大変面白いものだなと感じた。

プログラムの後半に行ったグループディスカッションでは、災害発生時、またその後どのような対応をしていくべきなのかを時系列別にわけグループでまとめた。プログラムの中で学んでことを活かして、様々な困難を抱えた人たちにも避難所生活を少しでも快適に送ってもらうにはどのような工夫が必要であるかを話し合った。国ごとの文化の違いもあり話し合いはとても難しく感じた。また今回のプログラムで使われる言語は全て英語であり、話し合いのときは本当に苦勞し、自分の英語力のなさを痛感した。しかしなんとか伝えたいという気持ちをもって、表情やジェスチャーで伝えるように努力すれば、相手もなんとかそれを聞き取ろうとしてくれたり、またゆっくり分かりやすいように話してくれたので、プログラムが終わる頃には、多くのインドネシアや台湾の生徒とも話すことができ、意見を伝えることができるようになったと思う。今回のプログラムでは災害時のジェンダーと脆弱性がテーマであり、それについて多くの学びを得ることができたが、私はもっと英語力を身につけたい、海外の人と意見を話し合えるようになりたいと強く感じ、今後の英語学習に対するモチベーションも上げることができ大変よい経験になったと思う。

プログラムに参加した日本、インドネシア、台湾は、どの国も島国であり周囲を海に囲まれ、また環太平洋造山帯に属していることで火山も有している。このような地形では様々な災害が発生する。そして地震、台風、土砂崩れ、火山噴火などの災害は人々の生活に大きな影響をもたらす。このような災害に対して、災害発生前、発生時、発生後、それぞれの時期に応じた準備や対策が必要であることを学んだ。また女性や子供、高齢者、障害をもった人々がそれぞれ持っている意見を反映できるような社会環境が整えられることで、災害時に生じる様々な被害を減らすことができるのではないかと思った。また住民一人一人抱える問題は異なり、それぞれのニーズにあった対策が求められている。今後は日本においても脆弱性を抱える人々とも協働した防災対策、減災対策をしていく必要性があると感じた。